

たりして、空也は自分の町よりもここに詳しくなった。

祖父母の家は川のほとりのマンションだ。ペランダは東向きで、商店街の端にある小高い丘の神社をこえて、向こうの町まで見える。空也の家がある方向だ。

玄関を出ると通路で、西には遠くに城が見える。町内探検だけでは物足りなくなっていた空也は、きのう城まで行ってみた。往復で二時間。そんなに遠くなかった。

もうひとつ、行ってみたいところがあった。北にある大熊山^{おおくまさんち}だ。

杏橋のかかる小栗川^{おぐりがわ}は南北に走っている。北にさかのぼると山地がある。地図ではそこから北はずっと山が続いている。小栗川の源が山の中にあるらしい。小さく宝生池^{ほしょういけ}と書いてあった。

空也はどれくらいの時間でたどりつくか計算した。杏橋から神社までが七〇〇m。これをゆっくり走って一〇分だけ行っただけじゃなくて、できれば水源も見たいし、そうしたらお昼を食べには戻られない。

夕食の時に話してみると、おじいちゃんもおばあちゃんも不思議そうに顔を見合わせた。

「だめ、かなあ」

魚にのぼしかけた箸を止めて、空也はたずねた。きよとんとした顔を先にしゃんとさせたのはおじいちゃんだった。

「いやいや、そうかそうか、うんうん、行っておいで」

「じゃあ、お弁当作りましょうね」

ふたりはびっくりするほど楽しそうな声になった。反対されると思っていたから、拍子抜けしてしまった。

二日後の朝の八時に家を出ることになった。

「どうだ、空也」

「楽しみ。おじいちゃんに行ったことある？」

「子どものころな。大人になってからは、仕事で山の工場に何度か。まあ、気をつけてな」

エレベーターでおじいちゃんが空也の背負ったリュックをぼんぼんとたたいた。

リュックには地図とお弁当と水筒が入っている。ほかに合羽と軍手があって、これはおじいちゃんが詰めてくれた。それから、おばあちゃんの携帯電話も入れてあった。何かあったらすぐに電話しろよとおじいちゃんは笑った。

「よし」

空也は張りきって、ペダルを踏んだ。

小栗川を左手に見ながら、自転車走らせる。川にかかっている橋があるたびに道路が盛り上げられていて、その登り降り、思っていたよりも体力をつかった。

信号待ちをしている時、計算ミスに気がついた。地図の上で、町から山まで、定規をまっすぐ当てて距離を測った